白昼夢

津高校文芸部

目次

津高紹介劇第一案「津高生は止まらない」（古井論理）……三
修学旅行（駄宰治）……一〇
満天の朝（古井論理）……一二
レク一日目にて（駄宰治）……一四
学年レクの話をしよう（古井論理）……一六
体育祭（駄宰治）……一八
文化祭機能制限版（古井論理）……一九
言えない（駄宰治）……二〇
十六夜に命ず（古井論理）……二三
皐月の病と宇宙人（古井論理）……四九
「津高生は止まらない」について（古井論理）……五四

津高学校紹介劇「津高生は止まらない」台本

古井論理

登場人物
・ナレーター
・アカリ
・チナツ
・スカラ
・サヤカ
・モブ津高生

ナレーター「津高。それは、三重県下の中学生に与えられた一つの選択肢である。そこには中学生の想像を絶する新しい教育、新しい探求目標、新しい習慣が待っているに違いない。これは、人生最初の試みとして津高の生活の体験に訪れた中学三年生、高橋アカリの驚異に満ちた物語である！」（可能ならスタートレックのテーマソングをかけたい）
アカリ（学校案内パンフレットを片手に周囲を見回す）
スカラ「何を探してるんだい？おっ、有能な学校案内パンフレットだねぇ」
アカリ「有能な学校案内パンフレットってなんですか」
スカラ「デザインが有能って……まあ今の子達は言わないか」
アカリ「いや……まあいいや、津高の特色を探せって先生から言われてるんですけど……津高の特色がよく表されたものってどこにあるんですか？」
スカラ「君、難しいことを聞くねぇ」
アカリ「どういうことですか？」
スカラ「僕が津高にいたのは、大正年間だからねぇ」
アカリ「……どういうことですか！？」
アカリ「つまり……あなたは幽霊？」
スカラ「そういうことになるね。君に姿を見せているのは君を助けたいからだ」
アカリ「……たすけて」（座り込んで目を閉じる）
（チナツ、サヤカ下手から登場）
チナツ「あー、スカラくんまたこんなところで人を脅かしてる……」
スカラ「この子が津高の特色を端的に表したものを探したいって言ってたからだ、脅かしたわけじゃない」
サヤカ「ああ、そういうことなら私達に任せて。スカラくんはいいから」
スカラ「じゃあ……頼んだよ」
サヤカ「スカラくんよりはずっと役に立つと思うよ。というわけで、きみに津高を案内してあげるよ」

アカリ「……ありがとうございます」
チナツ「私はチナツ、そこのお姉さんはサヤカ。よろしくね」
サヤカ「で、スカラくんは私達が津市の歴史について探求してたときに見つけたんだけど、まあそんなふうに探究活動ってのがあるんだ」
チナツ「学校案内パンフレットの表紙と次のページをめくってくれる？会場のみんなも、探究活動のページを開けてね」
アカリ「……ページ数とかないんですか」
チナツ「これには書いてないんだよねえ……まあいいや、続けるよ。探究活動は、一年生から三年生まで続くんだ。一年生では探求の基礎づくり、リベラルアーツをするよ。学校案内パンフレットには堅苦しいことが書いてあるけど、答えのない問題について考えたりする練習をするんだよ」
アカリ「答えのない問題……難しそうですね」
スカラ「僕たちの頃は大学入試の時点で学科の試験よりもその能力を求められていたんだよ。昔の大学入試では目の前に置かれた金属板の材質を考えたり、ようかんについて科学的に説明したりしていたんだ」
サヤカ「今でも大学に進んだあとや、さらにその先で求められるのは答えのある問題を解く力じゃなくて、答えのない問題を追求していくことだからね。それに、考えるのは楽しいし。それから、基礎的なことを研究したりもするよ。去年はホットケーキの研究をやった班とかがあったよ」
チナツ「二年生になったら、一年生のときの経験や知識を生かして本格的に研究をするんだ。大学とかの研究室とも協力できるよ。津高をスキャンしたり、しいたけを巨大化させたりといった研究をしている人もいるよ」
アカリ「しいたけを巨大化……マッドサイエンティストじゃないですか」
サヤカ「私たちは津市の歴史を研究してて、その中でスカラくんを見つけたよ」
スカラ「僕が話しかけたんだけどな」
チナツ「三年生になると、研究成果を論文にまとめて学会などで発表したり、うまくいくと企業と連携した商品開発もできるよ。夢を実現する近道になったり、いろいろなことを自分で体験できたりと、すごく津高らしい取り組みだね」
スカラ「本当に、君たちの研究はすごいよねぇ……さすが津高生だよ。僕が津高にいた頃から津高生はまったくその質を落としてない。むしろ質が上がってるんじゃないかな」
サヤカ「そして、学校案内パンフレットにある通り、色々な取り組みに参加できるよ。キャリアプロジェクトでは色々な地域活性化案を考えることができたり、他にも医療関連のことを知りたい人に向けての病院、看護系の見学や、他にも生物系、物理系、文系教科などいろいろなことができる夏季フィールドワー

ク、大学の授業を受けられる高大連携授業などの活動があるんだ」
アカリ「へえ……大学の授業ですか、受けてみたいですね。ところで津高ってどれぐらいの歴史を持っているんですか？」
スカラ「約……」
サヤカ（食い気味）「今年で創立一四一年になるよ。戦後にいくつかの学校と統合したけど、歴史の流れは一四一年間途切れてないから」
チナツ「ところでアカリちゃんは津高について、どんなイメージを持ってる？」
アカリ「超進学校で、厳しいイメージです。授業も六五分で長いと聞いてます」
サヤカ「よくある誤解だね」
アカリ「違うんですか？」
チナツ「津高は自主・自律をモットーとしていて、とても自由なんだ。探究活動のページの一つ前に書いてあるように六五分授業なんだけど、この六五分授業のおかげで一日に予習しないといけない教科が減るし、長い授業だけど慣れてしまえばなんてことはないし余裕を持って授業を受けることができるからとても有意義な授業方法なんだ。文武両道もモットーで、勉強と息抜きのメリハリをつけて頑張っていけるような環境が整ってるよ」
サヤカ「勉強についていけなくならないように、夏には課外学習があったりするし。津高に合格するぐらいの頭があれば、努力次第では東大合格も夢じゃないよ」
アカリ「へえ……ということは、部活にも力を入れているんですか？」
チナツ「お、勘がいいね。まずは探究活動のページの右側、部活動のページから。部活動はたくさんあって、色々なことをやってる。中には廃部寸前の部活もあるけど……まあ、詳しいことは津高に入ってからある新入生歓迎会で聞けるよ。兼部ももちろんOK、五兼部してる人もいるよ」
アカリ「五兼部！？大丈夫なんですか？」
サヤカ「兼部しやすい部活が多いから、いくつもやりたいことがあっても安心だね。まあ五兼部はあまりおすすめしないけど」
アカリ「へえ……学校行事はどうなんですか？」
サヤカ「部活のページの次のページを開けてみて。自主・自律って書いてあるページ」
チナツ「今年は私たちがメインになってやったんだけど、縦割りディスカッションっていうのがあるんだ。先輩の私たちからしてもなかなか意外な事実が聞けたりして面白いイベントだったよ」
サヤカ「体育祭では一組なら一組だけ、二組なら二組だけって感じで、一年～三年の同じ組を合わせて団っていうのを作って

三学年共同で競い合うの」
チナツ「これは正直、面白いけど他の行事に比べれば見劣りがするって感じかな」
アカリ「へえ……そんなに重要じゃないんですね」
チナツ「いや、そんなことはないよ。一～三年の交流ができるいい機会だから」
アカリ「あとは文化祭ですか？」
サヤカ「その前に、レク大を見てほしいな」
アカリ「ただのレクリエーション活動じゃないんですか？」
チナツ「ちがうちがう、そんなつまらないものじゃないよ。説明文の分量はその行事の重要度だと思ってもらえれば問題ないから」
アカリ「でも、どうせスポーツ中心ですよね……運動系種目の決勝戦は盛り上がるって書いてあるし」
チナツ「いや、オセロとかジェンガとかも重要な競技だし、百人一首に至っては百首全部暗記して絶対に取れる猛者とかもいるよ」
アカリ「へえ……すごいですね」
チナツ「スポーツ系だけじゃないから、文化祭と体育祭の間みたいな感じだね。競技に出ない時間はフリーだから、遊んだりする人や、応援に行く人がいたりするよ。あと、一部の生徒が応援に全力をかけたりするよ」
アカリ「なるほど、楽しそうですね。メモメモ……っと」
サヤカ「文化祭は会館企画、通称非公開の部では軽音部のライブや演劇同好会の劇、教員劇などの人気企画が盛りだくさん。それから、今年は公開しないんだけど津高で行われる公開の部では二〇〇〇人以上のお客さんが来られる一大イベントだよ」
アカリ「もっと詳しいことを聞きたいんですけど」
サヤカ「そこにいるのが文化祭委員だから、聞いてみよっか」
（モブ津高生に話しかける）「林さん、文化祭の解説お願い」
モブ津高生「非公開の部は先ほど言ってもらったとおりです。文化祭の公開の部の企画は各クラスで話し合って決めます。お化け屋敷やメイド喫茶、飲食店、枕投げ、縁日など、多種多様な企画が出ます。この企画をそれぞれのクラスで突き詰めていって、文化祭の当日に成功させられるようにがんばります。各クラスに予算二万円が交付されますが、いい意味で二万円とは思えないような完成度になることが多いです。今年はコロナで公開できませんけどね」
サヤカ「解説ありがとう」
（モブ津高生、上手へ退場）
アカリ「楽しそうですね」
サヤカ「他にも修学旅行では行った先で何をするかっていう計画を生徒が立てるんだ」
アカリ「そうなんですか！？」

チナツ「うん。楽しいらしいよ」
サヤカ「私たちはコロナの影響でまだ行き先すら決まってないけどね」
アカリ「大変ですね」
サヤカ「まあちゃんと行けるとは思う。ワクチン接種も進んでるからね」
チナツ「さて、ここで問題です。津高で朝のホームルーム前に流れる音楽は何でしょうか！」
アカリ「いきなり問題……」
チナツ「何でしょうか！」
アカリ「なんですか……？」
チナツ「会場の皆さんも考えてみてください。三択問題です。一、国歌。二、校歌。三、三重県唱歌。（十秒待って）では……一番だと思う人！」
スカラ（手を挙げる）
サヤカ「二番だと思う人！」
チナツ「三番だと思う人！」
スカラ「正解は校歌だね？」
サヤカ「うん」
チナツ「国歌のところで手を挙げてなかった？」
スカラ「僕のキャラ的にね」
チナツ「……まあいいや、次の問題です。津高生は弁当を忘れたときどうするでしょう。一、食べずにすませる。二、友達に分けてもらう。三、購買で売っているパンを買う」
サヤカ（十秒待って）「一番だと思う人」
サヤカ「二番だと思う人」
サヤカ「三番だと思う人」
チナツ「正解は三番です」
アカリ「ところで今はコロナ禍ですけど……私達の未来は大丈夫なんですか？」
チナツ「いきなりどうしたの」
アカリ「いや、今年度津高を受験してもメリットはあるのかな……と思ったので」
チナツ「あるよ、知識はちゃんと身につくから」
アカリ「でもそれは活かせるんですか？それから、高校生活はどうなるんですか？」
サヤカ「うーん……これは未来の話だからなんとも言えないけど……」
チナツ「私達が一年生の頃は大変だったけど、たぶん君たちが入学してくる頃にはコロナの影響は考えなくてよくなってると信じてるよ」
スカラ「まだ経験したことのない時代だからこそ、人はどう生きるか、どのように役に立っていくかを真剣に考えられるんだろうねぇ……僕が君たちぐらいの歳だった頃はまだそんなこと

を考えずに過ごしていけたけど、今の君たちは自分がどのように世界の役に立つかを考えないとこの世界を歩いていくことすらできないからね」
アカリ「前例がまったくないことを考える……なんだかさっきの探究活動の話に通じる部分がありますね」
サヤカ「そうだね」
アカリ「そういえばスカラくんってなんでスカラくんなんですか？言いにくいですよね」
スカラ「言いにくいとは失礼な。スカラ座っていうのは古い映画館なんだけど……ま、そういうことだ」
アカリ「わけがわからないんですけど」
スカラ「唯一残ってる僕の写真は、スカラ座の前で撮られた写真なんだ。僕は名前が思い出せない。だから、チナツやサヤカたちにスカラくんって呼ばれてる」（写真をプロジェクターに出す）
チナツ「っていうか、スカラくんは考えなくても生きていけたの？」
スカラ「僕が生きていた時代には、今ほどの自由はなかった。そもそも、日本は戦争のあとに自由な国になったんだから。その自由の中で自在に動けたのは自由が制限された中で制限されない知識を求めて勉学に励んだ人たちだった。そして、大多数の日本の人々はこれまでその自由の中でただ過ごしていたといってもいい。君たちの苦労は、新しくできた自由の代償とも言えるかもしれない。だけど、君たちは僕たちがたどり着けなかった時代に……僕たちより先へ進んでいけると思う」
アカリ「どうしてですか？」
スカラ「君たちは……特に津高に入るような人たちは、きっと将来について考えながら生きていると思う。それに、制限されない知識を求めている。アカリさん、君もそうだろ？」
アカリ「そう……かな？」
スカラ「そうさ。それに、今の津高生は自由の中で生きている。その素晴らしい力を、自由の中で自由に動き回るために使えるように探求している。だから心配しないでくれ、君たちはこの逆風の中でも飛んでいける。逆風を力に、帆船のように、ジグザグだとしても目的地にたどり着くだろう。僕や僕の戦友は、おそらく君たちがたどり着く未来を、全力をかけて守ったんだから」
サヤカ「スカラくん……なかなかいいこと言うじゃん」
スカラ「ありがとう」
チナツ「ところでアカリちゃん、津高について、少しはわかってくれた？」
アカリ「はい。先生からの課題もなんとか書けそうです。津高の特色は、生徒の自由を尊重し、まだ答えのない問題に考えを巡らせる探究活動のような活動を通して未来を切り拓く方法を知

るというところにある。勉強と息抜きのメリハリを付けて頑張る生徒が津高には集まっている……と。これでよし」
チナツ「すごいね……ちゃんと伝わってる。じゃあ部活見学行こうよ」
アカリ「じゃあ茶道部……」
サヤカ「何言ってるの、私の入ってるボート部でしょ。津高で一番古いし、全国大会にも行くんだから」
チナツ「いやいや、ぜひハンドボール部へ！」
スカラ「ペンは剣よりも強いよ、文芸部へ！」
アカリ「え～…」
（四人、上手へ退場）
（二秒待って暗転）
（三秒で明るく）
（四人、上手から登場）
アカリ「楽しかったです！ありがとうございました！」
サヤカ「ところで……今何時？」
アカリ「五時……あっ」
スカラ「そろそろアカリさんは帰るのか」
アカリ「そうだね……そろそろ時間だし」
サヤカ「じゃあね」
チナツ「また津高で会えるといいね。待ってるよ」
アカリ「はい！」

ナレーター「こうしてアカリは津高を受験するべく、勉強を頑張る決意を固めたのであった。会場の皆さんも受験勉強、頑張ってくださいね。ここまで見ていただき、ありがとうございました」

※この作品は昨年度三重県総合文化センターで行われた学校紹介において上演するために古井論理が制作しました。先生の認可を得たにもかかわらず、「戦争賛美をしているという点で論外である」「関係のない『戦争』を台詞に組み込み、必要のないメッセージを書き込んだ問題のある脚本である」という生徒の声によりリジェクト、つまり不採用処分となりました。なお問題であるとされた理由は「感情的に受け付けない人がいるから」でした。

修学旅行

駄宰治

僕はシュノーケリング（潜れなかったが。ライフガードをつけて上から眺めるだけ。）を無事終え、着替えていました。すごく楽しかったとは言えません（笑）一二月になったということもあり、ウエットスーツを着ても僕は寒かった。これに入るのか……と正直思いました。まあ、入ってしまえばマシになったかな。しかも、僕はバスの中で頭を下にして寝ていたので、きれいな海中の景色を見ているとなんか酔ってしまったんです。そんなわけで体の調子も悪かったこともあり、正直、命の危険を感じました。僕はもう「早く上がりたい……」の一心でした。その上、ものすごくきれいでしたが、海の中には小さな青い魚とウニぐらいしかいませんでした。一〇月だったらいたのかもしれません。でも、すごく良い経験になりました。結局こういうことが一番思い出になったりします。

バスに帰ると、疲れからかすぐに眠ってしまいました。目覚めるともうホテルの前で、僕は寝ぼけながらホテルのカードをもらい、エレベーターに乗りました。早めにバスからでてきたからか、前日よりは混んでいませんでした。ふと、柱をみると、ずーっと僕の顔が写っています。反対側にも同じ柱。お互いに反射しあっています。そういえば、「鏡の前で四五度にお辞儀をして、右を向いたら鏡の世界に連れて行かれてしまう」って都市伝説があったなあー……と思い、お辞儀をしてみました。そして右を向きます。案の定、何も起こりませんでした。

部屋に荷物を置いて、すぐに夕食会場に向かいます。そこは大広間で、ズラーと食事が置かれています。ワンピースの映画「ストロングワールド」のようでした。人はまばらにしかまだいませんでしたが、少しするとドーッと人が来ました。僕は目線のやり場に困り、天井のシャンデリアを見たり、食事を見たりしていました。結構時間が経ちました。やっと、委員会の人が「いただきます。」といい、みんな一斉にカチャカチャと食べ始めました。さて、ハンバーグをと、ナイフを持ったそのときです。僕は少し変な感じがしました。試しに、スプーンを持ちます。カチャ。その音がやけに大きく、僕はびっくりして周りを見渡します。するとみんな僕を見ました。その瞬間僕は気絶しました。みんな「僕」だったんです。エレベーターの鏡のように自分の顔が、みんな同じ表情で驚いていたんです。

ふと、目を開けると、バスの中でした。周りの人をみると、みんなちゃんと違う顔です。よかった……と思ったのも束の間、僕は窓の外のバスを見て驚きました。向こうからも「僕」が驚いてこっちを見ています。隣りには同じ子が座っています。スマ

ホを触っていたその子にききます。
「ねえ、あの、ぼく、間違ってこの世界に迷い込んじゃったんだけど。どうすれば帰れるとか知ってたりする？」
「え！？もしかして人間か？どうやって入ってきた？」
「四五度にお辞儀をして、右を向いた。」
「うーん……、それじゃもう一回同じことしたら戻れるんじゃね？」
してみたが、戻れない。
「……ヤバい。」
「違うって。それじゃあかんやろ。」
「え？」
「鏡の中やねんから、左向かな。」
あっ、なるほど。もう一度お辞儀をして、左を見た瞬間、真っ暗になった。

気がつくと、またバスの中。辺りはもう夜で、バスの光が邪魔で外はよく見えませんでしたが、元の世界に戻れた気がします。バスが「ルテホ」と書かれた看板の前で止まります。本当に長い一日でした。

コメント

なんか修学旅行で起きたことを赤裸々に書くのはちょっと恥ずかしかったので、少し物語にしつつ書きました。ところどころに体験したことを書いてあるので、「修学旅行ってこんな感じなんだあ」っていうのが新入生に伝わると幸いです。

鏡の都市伝説は岡田斗司夫さんの切り抜きが元ネタで、「鏡の前で四五度にお辞儀をして右を向いたら、あかん」というものでした。何が起こるか分からないのが怖いのに、ストーリー上自分なりに考えた結末を付け足してしまいました。

また、食器の音が一斉に鳴る様子は、最近見た「ミッドサマー」という映画のワンシーンに影響されてます。カルト宗教の話なんですが、正直、オススメはしません（笑）アマゾンがやたらと推すんで見てみたんですが、なんか、微妙ー……と見た直後は思いました。考察の余地を残しながら展開されていくところもあり、あまりスッキリしないんです。ただ、かなり独特な世界観で、三日ぐらいずっと怖かったです。

このようにパクリばっかの作品です。短くなってしまったのでいつもより多めにコメントを書きました。天気がものすごく良くて、富士山がクッキリみえたので、漫画「アイアムアヒーロー（これもオススメはしません）」を思い出しました。フェリーからの景色は最高でした。

満天の朝

旅先だからと張り切って
眠りを切り詰め朝は五時
露天の湯船に浸りて見れば
星はぺちゃくちゃ煌めいた

常夜の灯りは遠く燃え
沖合の船の航法灯
目に入るものは暗い海
真冬の伊豆は凛と晴れて

六時を告げる旅仲間
ふと水平を眺めれば
紫蘭に光る明くる日に
星の明かりはコバルトに

寒風の中にはたと立てば
我が身は湯気に包まれて
体が乾くその頃に
紅がかる丸き水平

古井論理

星の明かりは埋もれゆき
街の灯かりが取って代わる
水平線は赤く光り
海は突然朱に変わる

空は蒼ざめ星は消える
水平の朱　空の蒼
朱と蒼との境界は
虹のごとくに緑帯び

沖の岩にも光射し
街の灯りは薄らいで
蘇鉄と椰子が我を見る
風呂は今なお紺の藍

落ち葉が残る風呂端に
私はそっと足を出す
前を隠すはナイロンタオル
すでに冷たく手を醒ます

寒さに震えて我に返り
湯船は白き湯気に曇る

枯葉の浮かぶ露天風呂
朝ただここに極まれり

コメント

修学旅行で風呂につかりながら作った詩です。我々の修学旅行があったのは真冬の一二月でした。私は深夜二時に寝たあと朝五時に起きて露天風呂でゆっくり星を見ていたのです。風呂で立ち上がりさえすれば、沖合の海や船が見えるような露天風呂でしたから、なかなかに綺麗な朝焼けが見られました。テンションが上がるとともに、眠気が吹き飛ぶ感がありました。修学旅行の醍醐味は朝だと気づいたのはこのときでした。

レク一日目にて

駄宰治

僕はオセロにしました。レク、とは、レクリエーション。調べてみると、疲れを癒す娯楽、とあります。
「レク特有の暇な時間も、実は定義通りなのか。」
と僕は思いました。三日もあるということに僕自身ずっと疑問に思っていたんです。

しかし、今日は違いました。初っ端から競技がありました。あと、十分ぐらいで召集場所に行かないといけません。短い時間ですが、それはそれで手持ち無沙汰になってしまって、僕はうろうろしていました。

レク大会、が正式名称だったと思うのですが、それを聞くたびに僕は「大会かレクかどっちだよ。」と思いました。大会、や、召集、などの言葉を、僕は水泳で知りました。僕は十年ほども、水泳を習っていました。大会とレクは違います。大会は、こんなに気が楽ではありません。いや、もしかしたら大会を知っているからこそ、緊張しないのかもしれません。でも、体育祭よりレクの方が楽しい、という人もいるぐらいで、バレーとかサッカーはかなり盛り上がります。

召集場所（というか会場）まで歩く途中、メンバーの一人の子が僕に、
「緊張するなあ」
と声をかけてくれて、僕はうーん、みたいな曖昧な返事をしました。その子は誰にでも声をかけるような子で、どこか抜けていました。吹奏楽部の部長です。今思えば、コンサートとかの方が緊張するだろ。メンバーは三人で、二人は旧友という感じなのですが、とても優しく、予選を無事通過したあと、一緒にオセロの練習をしました。

その後、暇だったので、僕は昼寝をしました。起きて、しばらくすると準決勝の時間になりました。

寝過ぎたのか、僕は少し頭痛を感じていて、ぼーっとしていたのでしょうか。対戦相手の女の子が、
「え？いいの？」
ときくので、僕はわけもわからず、
「えっ？うん。」
オセロ盤は真っ黒になってしまいました。僕は白です。
「え、写真撮ってもいいですか？」
「あ、いいですよ、いいですよ。」
僕は大して本気ではなかったので、そう返事しました。もしか

したら、その女の子の行為は結構失礼なのかもしれないけど、それよりも、相手に了承をしっかり求める優しさに感動しました。周りの子も、えっ、えっ凄！！……って感じでざわつき、その写真もどっかで話題になるのかな、と思いました。その子は一気にオセロ名人になったのです。しかし、僕以外の二人とも勝ち、僕達は決勝に進めることになりました。

なんであんなことが起きてしまったのだろう。ま、僕のオセロ哲学が「序盤にとりすぎない」というぐらいの浅いものだったからでしょう。しかし、もっと冷静だったら、こんなミス起こりっこありません。

「次は寝ないようにしよう。」

と僕は思いました。悔しさというより、もしあそこで回避できていたら、まったく逆の展開になったかもしれない、と感じるからです。次も寝て、同じようなミスをして、でも別にいいんですが、どうせやるなら、自分の出せる全力を出したい、と思ったんです。

帰り道、「よっしゃー、決勝や。みんな結構強いよなあ。」と吹奏楽部の子が言って、いやいや、俺はもう全然、今回は二人が勝ってくれたからな、と言いました。

僕は決勝の時間まで、散歩したりしていました。廊下から見える木。周期的に上下しています。風の音がかすかに聞こえ、嘘みたいに穏やかで、綺麗でした。

決勝の相手は長考型でしたが、どこか空回りしているというか、感覚で打つ自分がなぜか優位に立ってしまって、でも、最終的にはその子の時間切れで終わりました。面白い人だなあ、吹奏楽部の子もこの子も。

「ありがとうございました。」

最初、こんな礼儀作法、レクなんやし、いいやろ、と思っていた自分ですが、この言葉を言われると、気まずくなくなります。だから、準決勝で負けた時も言ったんじゃないかなと思います。

僕はわずかに勝ったのですが、今回は他の二人が負けてしまいました。そういえば、決勝の相手の中に去年自分と対戦した、という人がいて、

「最後真っ黒にされた。」

と言っていました。一番かっこいい勝ち方やんか、と思いました。ほんの去年のことのはずなのに、記憶が曖昧です。いつかまた、そんな勝ち方をしたいです。

学年レクの話をしよう

古井論理

津高校の行事の中で、最も影の薄い行事はおそらく学年レクリエーションだと思う。レクリエーション大会ほど派手ではなくて、たいていドッジボールをするだけ。そのドッジボールもハンドボールのボールを肩の強い運動部員が力いっぱい投げ飛ばすような、戦略を考えるよりもむしろ殲滅作業に近い方法で相手をちぎっては投げる、かなり原始的な「闘争」とも呼べる代物だ（と、私は勝手に思っている）。ちなみに作者の実体験なので悪しからず。

だが、この「闘争」はときに頭脳を駆使し戦略を考え、力を絞ったり全開にしたりして緻密な戦術を織り交ぜ、駆け引きを行うどんな「スポーツ」よりも頭脳的で、私のような文化部の生徒も楽しめる非常に優れたレクリエーションとなるのだ。

「おい木村、ぼーっとしてると当たるぞ」

ふと目線を上げると、目の前からやや下げ角をつけて飛んできているハンドボールの球が目に入った。

「心配ご無用」

私はカニのように右へ体をずらしてボールを避け、百八十度回って相手の外野から離れた。

「木村を狙うんだ！」

「あいつなら当たるだろ」

外野からはそんな声が聞こえる。私は手を前に伸ばし、手のひらを上に向けて招くように人差し指から小指までを前後に振った。

「おっ、あいつやる気だぞ」

外野からの声は冷めている。もはや何も考えていない……と言ってしまうと言い過ぎになるかもしれないが、なんとなく殲滅作業だと考えている節はありそうだ。私は自分の陣地に残るメンバーに目を通す。私を含めて、残りは四人。一チームは十人なので、相手の外野にいるの六人なのを考えると数の上では同等だが、受け止められる人が全員やられているという点で少しこちらが不利なようだ。私は逃げることを選択した。

「おりゃあーッ」

外野にいたハンドボール部の部員が渾身の力を込めて、ストレートを投げてくる。速い。だが、まっすぐ狙っているのだから左右に動けば避けられる。

「ふっ」

私が左に回避すると、その球は相手陣地との中間にいた審判の先生にクリーンヒットした。申し訳ないとは思うが、これで我々の外野にボールが回った。

「誰でも良いから当ててほしい！」

私がそう叫ぶ。外野は相手チーム四人のうち一人に狙いをつけた。

「食らえ！」
相手陣地の一人に、強烈な下げ角がついた球がぶつかる。脚に当たったそのボールを拾った相手チームの一人が、私たちのチームの陣地に向けて投げてきた。狙いは私ではない。
「避けろ、右だ」
私が叫び、狙われたチームメイトは少し迷ってから右へ踏み出した。球はかろうじて肩をかすめて通り過ぎ、そこでホイッスルが鳴る。

「木村、割とすごい活躍じゃないか」
外野から戻ってきた我々のチームのリーダーが言った。私は照れ隠しに笑う。笑いながら、闘争本能に代わって急激に焦燥感が出てくるのを感じた。次の対戦相手は現在のところ我々の三倍ほど対戦成績が良い。武者震いを抑えて、私は再びコートに立った。
「木村、そこは隣のコートだぞ」

体育祭

駄宰治

ユーチューブでよく見る、剣道部が防具をつけたまま、水泳部が水着のまま、バスケ部がドリブルしたまま走るリレーが、我が高校でも行われます。それを一緒にレクでオセロをした三人とみました。

「水泳部、ヤバいなw 水着は寒いww」

と吹奏楽部の子がいいます。

誘われたのにことわった水泳部。十年も水泳を習っていたので、泳ぎには正直だいぶ自信ありますが、頑なにことわりました。

「あのコーチもいないよ。」

と、たぶん今一番水泳部で速い、全国大会にも出場する同じスイミングスクール出身の子に言われました。確かにコーチは好きではありませんでしたが、僕も悪かったと、今では思うんです。しかし、ことわっておきますが、僕はその子ほど速くありません。スイミングスクールで、最下位でした。だから、これはスカウトでは断じてありません。勧誘です。

僕が帰宅部でフラフラしてるのを心配してくれてるんやな、と思った僕は、Jr. com 部と文芸部に入部しました。

誘ってくれるなんてもうないんやから、とも思いましたが、なぜかもう水泳は辞める、と踏ん切りがついてしまってるんです。たぶんこの気持ちは何かをやめた人にしか分かりません。やめるまではいろいろ悩みますが、やめたらどうってことないんです。だから、「部活だるいわあ、全然時間ない。」っていうようなことを言ってる人を見ると、え?やめたらええやん、と疑問に思います。

偉そうなことを言ってますが、僕も水泳をやめたのは中三の夏休み前です。いろいろ嫌なこともあったし、大変だったし、でもその当時の自分は自分なりに最善のことをしていたな、と思うので、後悔なんてまったくしてません。

水泳部、また他の部活のリレーをみて、そんなふうなことを思いました。

文化祭機能制限版

古井論理

コロナのせいで文化祭は試供品のようなものになった。校外の人も来ない、文化会館で行われるような大規模な軽音楽部のライブもない、教員劇も有志発表も何もない。製品版なのに機能制限版、それが現状経験した唯一の高校での文化祭である。

「すみません。King Gnu の井口さんに似てますよね！ただ言いたかっただけなんですけど」

部活の大会のとき、名前も知らない他校の女子から初対面でそう言われたのは、今年の春。私にエンタメ性があるとは思えないが、そう言われるとなんだか嬉しい。ちなみに私は似ているとは思っていない。

「文化祭なんかで仮装大会したらいい線行くんじゃないですか？先輩面白いし」

後輩にそう言われたが、後輩の皆さんは文化祭がどんな行事かを正確には知らないばかりか、文化祭に参加したことすらないのである。私は少しばかり複雑な気分だった。まあ、何はともあれ機能制限版の文化祭を語るとしよう。以下は筆者のコメントのようなものである（まあこれ自体エッセイなのだが）。

私は文芸部と Jr.com（漫研）で店番をし、天文部でプラネタリウムの説明をし、生物部でクイズの店番をし、演劇同好会では細々と行われた劇に出演した。劇のタイトルは「ルナとテラ」という（作者注：普通に面白いので是非脚本だけでも読んでみてください。私はテラ役をしました）。この劇をして、そのほかの部活の店番すべてのシフトを入れまくると昼休憩すらないほどの忙しさが実現できる。おすすめはしない。というか避けることを強くおすすめする。三兼部が限界である。実は成績表にも三つまでしか載らないから、つまりそういうことだ。間違っても筆者のように五兼部するなどといった真似はしないように。

脱線はその程度にして、とりあえず Jr.com 部の準備の話からしよう。Jr.com 部は例年くじ引きをやっているが、そのくじ引きの景品にポスター、プラ板、カードを作らなければならない。描くのにかなり苦労したが、先輩方の作業量には頭が下がった。印刷から何から何まで先輩がやってくれたのだ。あの先輩方なら何でもできると思う。

そして文芸部は文化祭特大号を出して、それを配布する作業がある。これが一時間続いたあとに文化祭は終わった。

忙しすぎてどこの出店にも行っていないし、事後に写真を分けてくれる友達がいるわけでもない。だから私は、まだ本当の文化祭はおろか機能制限版の文化祭すらまともに知らない。どうか皆さんに本当の文化祭を体験できる日が来ますように。

言えない

駄宰治

ヒロは、プール更衣室で着替えていた。バスタオルで体を拭き、服を着る。そこにギュ、ギュ、とマットの水を蹴る音がして、ヒロは驚く。今日はマヤとヒロの二人しかプールにいないはずだからだ。そのマヤが入って来たと知り、

「いや、あの、男子更衣室だよ、こっち」

マヤは入り口で止まって、戻るのかと思いきや、真っ直ぐにヒロを見つめて、

「私、自殺しようと思うんだけど、どう思う？」

その真っ直ぐな瞳に気圧されたのか、優しさからなのか、ヒロも真面目に

「どうしたん？なんかあったんか？」

「なにも、なんかないと、いけないん？」

マヤはそう言うと、戻っていった。ヒロは、悩んだ。これが自分の彼女に出せる最適解だったのか。しかし、彼女の決意にはまだ猶予があるようにも、ヒロは感じていて、彼女を引き止めることはしなかった。

ヒロも、どこかずっと彼女と同じような思いでいた。

「五秒前ー(サイクル、要はどれぐらいのペースで泳ぐかが水泳の練習では決まっていてる。スタート時、毎回こういう声かけをする。)」

とヒロは言い、タイミング良く、壁を蹴った。マヤも同時にスタートする。ヒロはこのスタートの瞬間が一番スピードが出て、好きだった。ビュッと、真っ直ぐに、プールの中を貫く。マヤがついて来なければ、もっと気持ち良かっただろう。女子に当然のように追いつかれる自分。しかしペースを上げようとは思わない。彼女をペースメーカーにすることで楽にサイクルをこなそう。そう言う優越感の方を取った。さも楽な様に、一定のリズムで。自分はいつでも余裕ですよ、と彼女にいばるのだ。そんなことのために、わざとスタートまでの時間も息を荒げない。実際、ヒロは体力には自信があった。

広いプールに二人だけなのである。どこからか向こうの曇って見えないところから誰かが、もしくはサメかなんかが来そうでヒロは怖かった。しかし、正直少し疲れてくると、考えられなくなった。

最後はハード(サイクルではなく、タイムを意識して本気で泳ぐ)で、普通ならコーチが測ってくれるのだが、二人は時計で測るしかなかった。さあ、ためた力を出そう。ヒロは一気に加速、どうだ、と横を向いた時、彼女もそこにいた。一騎討ち。なかな

かマヤは落ちなかった。わずかに、ヒロが勝った。

イージー(体を休めるため、ゆっくり泳ぐ)をして、さあ、帰ろうと彼はプールから上がった。するとマヤが、ちょっと待って、と彼に言う。彼は着替えて更衣室の前のベンチで彼女を待った。マヤは意外とすぐに出て来て、

「泳いだら、なんか、スッキリしちゃった。」

ああそう、とヒロは答える。ベンチの端に腰掛けた彼女は、

「でもさ、私なんてさ、生きてても死んでても同じかな、とは、ちょっと思うかな。」

照れ隠しか、彼女は太陽の方を見てそう吐露する。彼はなにかを言おうか、言わないか迷っていたが、彼女が、ちょっと図書館に行こう、と言ったのでそれにしたがうことにした。

みんな部活に出ていて静かな廊下。ヒロが質問する。

「こんな時間に開いてるかな。」

「……閉まってはないと思う。」

少し気まずい沈黙の中、マヤはたどり着いた図書館のドアを開けた。薄暗くなっていたので、自習をしている三年生なども、もう帰ってしまったのだろう。マヤはそんな蒼い教室の隅に行って、しゃがみ込み、一冊の本を開いて読み始めた。ヒロもなにか読もうとするが、すぐに閉じてしまった。

ヒロは手持ち無沙汰という感じで、どこか暇そうに、窓を見たり、辺りを歩いていた。するとマヤが、

「こころ、にもあるけど、もしかしたら個人主義社会だから、つらいんかもな。」

「ん？個人主義社会？」

「え！？授業でやってない？」

「いや俺理系やから、あんまちゃんと現代文の授業聞いてないんよな……」

「ああ、」

ヒロは唐突になにか言わないといけないような気がした。

「あのさ、どっかの、漫画に書いてあったんやけど、儚い存在だからこそ、頑張るんちゃう？」

マヤは目を丸く開いた。そして、

「・・いいね、それ」

マヤの顔が少し笑顔になった。そして、

「優しいね、ヒロは」

ヒロは曖昧な顔をしたが、内心正直とても嬉しかった。しかし、彼の目の端に、下校するカップルの姿がうつる。その瞬間、

「俺、マヤが思ってるより、エロいよ」

そしてヒロは図書館を急いで出て行く。ヒロはマヤが好きだった。でも、これは違うと思った。彼の心に浮かんだのは、「詐欺

師」と言う言葉。彼女は今、病んで人の優しさに弱くなっている。そこにつけ込んでいるように感じた。

夜、ヒロはこんなことを思う。
「もう、決着をつけよう。」

翌日の帰りの電車で、彼は昨夜考えたことを実行しようと思っていた。揺れる車体。美しすぎる青い山々。夕日。

ホームで座るマヤに言う。
「死のう。」
マヤは不機嫌そうにヒロについて行く。駅からでて、立ち入り禁止の看板をくぐり、「天気の子」のラストシーンみたいな階段をのぼる。

「ここから、落ちたら死ねるよ。」
「分かった。」
カン、カンと、彼女が迷いなく前進する。ヒロは彼女の決意を確かめるため、何もせずに見ているつもりだった。しかし、彼女が端に立ったとき、条件反射的に彼女の手を掴んだ。
「なに？本気じゃないとでも思ったん！」
飛ぶよ、そう彼女は膝を曲げて、くずれた。そして吐いてしまった。
「……手なんかつながんといてや、うっ、うっ」

廊下でバッタリ会った先生に、ヒロは、
「ああ、ちょっと待って。水泳部、廃部になったから、伝えようと思ってて。すまんな、やっぱり、プールを使うのが水泳部だけやったとしても、水泳部だけ部員少なくても廃部ならん、ていうのは不公平やから。」
ヒロは別になんとも思ってない、という調子でいた。そして、マヤにそのことをラインする。するとマヤから、
「でも、更衣室には来てよ。一緒に勉強しよ」
と、意外な返事が来て、ヒロもそれに賛成した。ヒロは、もう悩み疲れていた。メモ帳のぐちゃぐちゃぐちゃの文章を消して、
「お前の言いたいことは、要するにこうや」
と、「思春期。」と打った。歩いて行くうちにヒロはいや、と立ち止まり、それを、
「青春。」
と変えた。足取りが軽くなったような気がした。しかし、歩けば歩くほど、あのことが鮮やかに浮かんでくる。
あのとき、彼女が本当に飛び降りてたら？
歩けば歩くほど、なんか血の匂いがする。ヒロは、マヤと話したくなった。

十六夜に命ず

古井論理

それは高校の生物部が企画した研修で行った伊賀から研修を終えて帰っている時のことだった。私は隣にいた後輩―クイズ部と兼部していて、通称はチャットアプリでのハンドルネームから取って「解放戦線」である―と世間話をしていた。

「どうだい、疲れたかな」

解放戦線に訊くと、解放戦線は少し目を伏せてイヤホンを取り出した。

「ええ。そろそろ寝たいので少し静かにしていていただけますか」

「ああわかった」

解放戦線がイヤホンを耳にかけ、目を閉じる。私はポケットからスマホを取り出し、画面を点けた。と、バスのディーゼルエンジンが立てるノイズの間に、微かな着信音。私の手の中でこれから起こることを暗示するかのように、スマホが激しく振動した。

犬飼拓海―畜生……

―一番最悪なことが起こった……

続けざまに画面に表示される犬飼からの二件のメッセージ。

彼の日頃の文章や発言からは想像できないような重ね言葉に、私はただならぬ事態を読み取った。

古井論理―なにがあった

入力中の表示が一秒ほどで止まり、送られてきたメッセージは私の頭にクッションで殴られたような衝撃を与えた。

犬飼拓海―さゆさん危険事態

古井論理―なんだと

―生命に関わるか

犬飼拓海―もう疲れた、ごめんもう消えたい

この後既読なし、通話も三分コールしたが反応なし

私の脳裡に「自殺」の二文字が浮かぶ。過去に似たような事があったときも、私のもとには断片的で暗喩のようなものしか残らなかった。

古井論理―うわわわ

間抜けな悲鳴にしか映らないようなメッセージを送ってしまったが、それどころではない。私は踏切にさしかかり揺れるバスの中で、タイプミスをしないように気をつけた。

古井論理―家に行け

それからこの情報を付け加えた方がいいか。

古井論理―首をくくったのなら二〇分以内で志望確率が一〇〇％になる

「志望」と誤変換したことに気づいたのは、切迫した空気に気圧(けお)されてメッセージを送ったあとだった。

犬飼　拓海―まじかよ

まずもって彼から送られてくる文章とは思えない文章。よほど気が動転しているのだろう、そのあと入力中のテロップが表示されては消えていた。

…入力中

…入力中

……

……グズグズしてる場合か。手遅れになったらどうする。

そんな言葉ばかりが頭の中を駆け抜ける。かつて興味本位で飲んだミョウバンを溶かしたにがりを口に含めるだけ含んだような気分がした。

古井論理―なるべく早く見つけるんだ

―急げ

「居場所はどこか分かっているか？」と確認しようと思ったところで、犬飼からようやくメッセージが送られてきた。

犬飼拓海―恐らく家にいると思われるんだ

なんだ、おぼろげながらも分かっているのか。ならばなおさら「グズグズするな」。

古井論理―急げ

―家に行くんだ
―親がいるなら部屋を確認するように言ってくれ
―そうしなければ危ない

続けざまにメッセージを送る。この間、わずか五〇秒もなかっただろう。

犬飼拓海―17:12 さゆ　『ごめん』
17:12　［メッセージの送信を取り消しました］
17:13 さゆ　『私もう消えたい』
17:13 たくみ　『うん』
17:15 たくみ　『衝動に任せて動かないように一回椅子か何かに座って』
17:15 たくみ　『椅子なければ最悪床』
17:17 たくみ　［通話キャンセル］

この状態

私の脳内に「『うん』とか言っちゃ駄目だろ」という言葉が浮かび、手が打ち込みを始める。しかしそれどころではないことにはとうに気づいていた。

古井論理―まずいぞ……親に連絡！

芝居がかった六つの点が、予測変換で勝手に出てきてメッセージに挟まる。犬飼からはすぐに返信が送られた。

犬飼拓海―親の連絡先知らんよ

私は一つだけ、考え得る最良の選択肢を送った。

古井論理―なら家まで走れ
犬飼拓海―あ、佐藤は知ってる

こいつは何を言ってるんだ。私は心の中で頭を抱えていた。

古井論理―ぐずぐずしていると死ぬぞ
―家まで自転車で行くんだ
―急げ
―好きな人だろ？
―知っている人が死ぬのは嫌だ
―君だって嫌だろう
―無理矢理にでも止めろ
―紐を切れるものを持つんだ

―いや、何も持たなくていい
―とにかく急げ

メッセージを連続して殴り書きのように打ち込む。約五分後、電話がかかってきた。
「メーデー、メーデー」
犬飼が少し荒めの息をつきながら、普段よりかなりトーンの高い掠れ声で喋っている。なりふり構わぬ声は、どうやら覚悟を決めたようだと察するには十分だった。
「どうした」
私はバスのディーゼルエンジンの音に隠れるように携帯を通路側、左の耳に当てて右手で口を覆い、エンジン音に寄せた低めの小声で返事をした。
「今走ってる……」
犬飼はやっと行動に移したようだ。私は若干の安堵と嫌な胸騒ぎを覚えた。
「わかってる。わかるか、残り二分だ。急げ」
ときに一七時三一分。私が最初に提供した情報に基づくなら、一七時一三分以降に吊ったと仮定して一八分が経過している。
「ああ、わかってる……坂きつい！」
少しして、犬飼の息がすこし落ち着いたのを感じた。
「家にいたら突入するんだ。窓を割っても構わんだろう。というか……さゆさんはいるのか？」
「とりあえず……家には誰もいない……か？明かりがついてない、車はある……」
犬飼の返事に、なんとなく予測していた事態を感じた。犬飼はインターホンを鳴らしたようだった。
「すみません……あの、ちょっとチャットしてるときにさゆさんの様子が怪しかったので大丈夫かな……と」
さゆさんの母とおぼしき声が返す。
「少し前に出て行ったけど……」
「どのくらい前ですか？」
「日が落ちる前にちょっと出かけるって言って出て行ったけど……もう日も暮れるよって言ったけど大丈夫って言って出て行った」
私は日没時刻を調べる。「一六:四九」という検索結果が表示された。
「マジか……実は今ネットの友人と少しトラブルになってるみたいで、こういう状況なんですけど」
犬飼の声がマイクから遠ざかる。状況を説明しているようだった。
「少し見せてくれる？」
「どうぞ。どこ行ったんだろうな……」
犬飼の声が再びマイクに近づいた。

「古井君、どこにいると思う？」
私は「屋外ならば」と首吊りでない可能性に従って考えを巡らせた。
「その周辺徒歩二〇分以内のエリアに高さが四メートルを超える断崖、飛び降りやすそうな場所、あるいはフェンスの低い崖はないか？そこにいるとすれば足がすくんで容易には飛び降りたりできないからまだ健在かもしれない」
犬飼は少し考えたあと答えた。
「ここら辺は山がちだけど……ないかも。わからない」
飛び降りならば他には……川か。
「なら川だ。橋桁が四メートル以上で、乗り越えられるくらい欄干の低い橋は？」
「橋は二個。だけどどっちも橋桁は僕の頭ぐらい」
「流れは」
「どっちもゆっくり」
「川の水量は」
「小さな川にかかっているのが一つ」
「もう一つは？」
「一級河川にかかってる」
「そこは徒歩二〇分圏内か？」
「僕徒歩が分速一〇〇メートルだから参考にならないかも……」
「換算すればいいんだよ」
「……余裕で二〇分圏内だよ」
「ならそこかも」
バスが山奥の森林に入る。来たときはここで少し通信障害が発生したな、と思い出し、通話が切れないことを祈った。
「ちょっと待って、あてがあるかも知れない」
「どこ」
「ハルさんのところかも」
「そこは近いのか？」
「わりかし近い」
「でも今から消えたいって言ってるような人が友達の家に行くかな」
「……」
犬飼拓海―すまん切らせてもらう
メッセージが届き、通話が切られる。私は見つかることをただ祈ることしかできなかった。
犬飼拓海―さゆさんみつけた
このメッセージが届いたのは一八時を回った頃だった。すぐに返信を打ち込む。

古井論理―わかった

二分経っても何も応答がなかったので私は通話開始をタップした。

古井 論理―［数秒の通話を開始しました］

思い直して通話をすぐに切り、メッセージを打ち込む。

古井論理―よかった

―生きてるな？

犬飼拓海―生きてる

―とりあえずどうしよう

今どこにいるかがわからないとなんとも言えない。私は質問に質問を返した。

古井論理―どこにいた

犬飼拓海―公園

予測が外れたことに責任を感じながら、さゆさんがどのようにしてそこで見つかったのか訊いた。

古井論理―何してた

犬飼拓海―うずくまってた

―スマホ以外何も持ってないし

―フェンスもあるし大丈夫そう

「フェンスに囲まれた公園」という情報に一種の安堵を感じかけたが、それにしては切迫した持ち物と体勢のようだったのでかなり怖かった。

古井論理―とりあえずさゆさんに「死ぬな」「消えるな」とだけ伝えてくれ

―君が消えたら悲しいとも言ってやれ

と、ここで私の頭の中に嫌な想像が浮かんだ。うずくまって死ぬのを待っていたのだとすれば？急いで確認する。

古井論理―毒は飲んでないな？

犬飼拓海―毒になるようなものは飲んでないと思う

なら安心だ。身体に異常があれば別だが……。

古井論理―喉、皮膚に異常はないか

犬飼拓海―特には大丈夫そう

―転んでもないって言ってた

ならあとはメンタルだけだ。妙に冷静で器用な自分に驚きながら、静かに画面上のキーボードをタップする。

古井論理―さゆさんが自殺しなくていいようにするために、勇気を出すんだ

以前から犬飼はさゆさんのことを好きだと語っている。そんな彼を動かすためにさっきも「好きな人だろう？」と送ったのだ。ここで二人がくっつけば、もしかするとさゆさんがより犬飼を頼りやすくなるかもしれない。だから暗に「くっつけ」と今送るのだった。

犬飼拓海―うむ

―でも今は結構取り乱してるし、少し落ち着くまで……ってしとく

私は納得しながら歯がみをした。とりあえずメンタルを回復させるために犬飼にメッセージでアドバイスする。

古井論理―とりあえず落ち着いたらさゆさんが大切だということを伝えてあげるんだ

―黙っていると空気が悪くなるからなるべくさゆさんに構ってあげること

―さゆさんの親に、さゆさんに聞こえないようにメンタルクリニックの受診を勧めて

犬飼拓海―おっけ

―青葉くんはもうこっちでやるしかないな

青葉とは、さゆさんがトラブルを起こしているネッ友である。彼の話はすでにいくつか聞いていたが、理論が通じなさそうだと思えるようなものばかりであった。とりあえずメンタルクリニックの注意事項を言っておく。

古井論理―あとメンタルクリニックは合う合わないが大きいから気をつけて

犬飼拓海―おっけ

そうだ、青葉の問題を解決するのには証言者もいるだろう。

古井論理―青葉くんは通話で事情を説明して懇懇と責任を説いてあげましょう

―私も言おうかな（おい）

犬飼拓海―二対一の方がいいと思う

古井論理―そうよね

意外と受け入れられるものだな。そう思いながら犬飼からの続報を待った。

犬飼拓海―委任状書かせたいけどそれは出来そうにないや

古井論理―論理武装と作戦は立てたほうがいい

自分のペンネーム「論理」を含んだ「論理武装」という言葉を使うという端から見たらナルシズムの究極とも取れる発言をしたのはわざとではない。ただ、それしか言葉が思いつかなかっただけだ。

犬飼拓海―待って超お腹痛いwwwwww

―安心してお腹痛くなってる

犬飼は走ったのだから、急を察して分泌されたアドレナリンが切れれば当然ながら腹も痛むだろう。まあそれはそれとして犬飼の言っていた委任状に返信をつける。

古井論理―口約束も契約だから「青葉くんとの問題は僕と論理くんが引き受ける」とでも言おう

犬飼拓海―おっけ

―そうしよう

古井論理―これで承諾があれば契約成立だ

犬飼拓海―そうね

再び少しの不安が出てきたので、犬飼にさゆさんの安全を確保しているか確認する。

古井論理―あとさゆさんを車の中へ

犬飼はそれには返さず心配を吐き出した。

犬飼拓海―こういう状況初めてだから

それには答えず私は状況を語る。

古井論理―或いはどこか建物の中へ

犬飼もそれには答えない。

犬飼拓海―なんていえばいいか

私はとりあえず犬飼の発言に私なりの答えを返す。

古井論理―「何をしようとしていたかは聞かない。でも消えないでくれ、僕は君が消えるのが嫌だし悲しいんだ」とでも

犬飼はまた青葉の話に移った。

犬飼拓海―とりあえず委任の音声はとった

―これでおっけ

古井論理―おーけい

ここで一旦私は話を切った。バスが高校に近づいたからだ。

「古井くん、起きてる？」

一つ後ろの席に座っていた同期の畑村（はたむら）さんが私に聞く。私は「起きてますよ」と明るい声で言って、荷物をまとめ始めた。

「あと一五分ぐらいで着くよ」

予定調和とも思えるほど見事にかみ合った結果残された一五分は、ちょうど荷物を片付けて後輩と世間話をするのにぴったりであった。

「先輩、確か彼女できたんですよね」

最近できた彼女の話を振られた私は、慎重に答えた。

「うん」

後輩はチョコレートの箱をたたみながら私の方を一瞥した。

「バレンタイン、楽しみでしょうね」

私は聞いた人を驚かせることで有名な自分のバレンタインを語った。

「バレンタインのチョコレートは……多分私が作るよ」

後輩が冷やしたチョコレートのように固まる。

「え？」

「私はチョコレート自作派だよ。カカオ八二％のチョコレートを毎年作ってるんだ」

後輩は目を見開いた。

「八二％！？」

私は立て板に水を流すかのように多少早口で語った。

「美味しいよ。苦みよりも旨味が立っていて良い」

後輩は戸惑っている。

「そう……ですか。先輩、もしやコーヒーはブラック派ですか？」

「ああ、そうだね」

「やっぱり苦いのが好きだからでは……」
私はまたも早口で、今度は好きなものを語るマニアのように語り始めた。
「違うよ。ブラックは糖分が入ってないから脳に血液を回したままにできる。つまり眠くなりにくいんだ」
「……なるほど」
後輩が困惑を表情に貼り付けて答えた。
「さて、そろそろ高校が見えてくるね」
「見えませんよ、真っ暗なのに」
「鳥目かな？」
私の言葉に、後輩が少しむっとして応じる。
「こんなに明るいバスの中から暗闇の中の高校が見える先輩が異常なんですよ」
「……確かにそうかも知れないな」
バスは角を曲がり、高校への一本道を突き進む。バスは校門を抜けると理科棟前に停車した。ドアが開く。
「降りて」
先生が私たちを急かした。
「はいッ」
私はなるべくシュールで真面目に聞こえるように返事をして、荷物を背負った。来たときよりも重いリュックの中で、途中立ち寄った図書館で手に入れた戦利品（除籍された書物）がおどった。一人で帰ろうとした私に、畑村さんともう一人の同期―江崎さんが近づいてくる。
「あ、一緒に帰りましょうか？」
「ありがと。真っ暗だし、女子だけではちょっと怖いからね」
「怖い話でもしましょうか？」
畑村さんはさっと江崎さんの影に隠れ、私の隣を離れた。
「どうしたの？」
「いや怖いの嫌いだからさあ」
私は「怖い」の路線を変更することに決めた。
「じゃあ理論的なホラーにしましょうか」
「え？」
「考えると怖い話ってやつです」
江崎さんが聞きたいというふうにしていたので、私は話を始めた。ちょうど校門をくぐって道に出たときだった。
私がした怪談は、自分からしても難解だったと思う。
「そこが夢の中であることを判別する有名な方法としては、そこにある文章を読んでみるというものがあります。文章は脳が考えた仮想空間たる夢の中では、内容が読むたびに大きく変わるそうです。このようにして、夢と現実を見分けることは簡単にできます」

「へえ」という声が畑村さんから上がる。
「それでは本題に参りましょう。ある人が、『自分が死ぬ』という夢を見ました。夢を見た人は、これを予知夢と考え恐れました。しかし夢占いでは昔から死ぬ夢は吉兆とされています。なぜなら『復活』を意味するからです。しかしその夢を見た人は、実際に死にました」
「続きは？」
江崎さんが聞く。私は即答した。
「これで終わりです」
「へ？」
「私はその人が判断したとおりに語っただけです」
江崎さんと畑村さんは「意味が分からない」とでも言いたげな顔をしている。
「つまりその夢を見た人は、『自分が死んだ』という事実を『夢』と判断した。それだけのことですよ」
「SFなの？」
「まあある意味そうですね。死んだ人の話を聞いた体で語っているわけですから」
「……？」
戸惑う二人に、私は解説を加えた話をした。
「夢を見た人を仮にAさんとすると、自分が体験したことを『自分が死ぬことの予知夢である』と考え恐れている時点でAさんはすでに死んだあとというわけです。そしてAさんは夢の中でのみ生きている。これは現実での『復活』ではなく夢の中での『復活』です」
私は説明しながら、この話が今の自分か犬飼のいずれかに当てはまるのではないかと考えを巡らせていた。看板の文字を読むと、綺麗なまでにまとまった文章が何度も同じように読める。
―ここが現実であるというのは疑いのない事実か。
私はそう考えることにして、納得しかけている二人を見た。
「こういう恐怖は我々が直視すればいつでもそこにあるんですよ」
と、江崎さんが「コンビニで何か買ってかない？」と言い出した。
「どうしてです？」
「怖い話をしたあと家に直帰するとまずいって聞いたことがあるから」
そういえば怪談のあとに寄り道をするのは最も手軽なお祓いだったな。
「そうですね、コンビニに行きましょうか」
私たちは信号を渡り、コンビニに入った。エナジードリンクの棚を物色していると、畑村さんが心配げに言う。
「エナドリは……身体に良くない……と思う……よ？」
「まあそうですね」

ここは素直に忠告を聞いた方が良いだろう。私は菓子の棚を物色して、カリカリ梅が半額になっているのを発見した。
「これにしよっと」
私はカリカリ梅を取り、レジで八〇円を支払う。私が店の外に出ると、いつの間にやら畑村さんと江崎さんはすでに外にいた。駅のロータリーに入ると、塾の明かりが目を刺した。
「さて、塾に行くのはやめて帰りましょうかね」
「え？」
「眠すぎるので」
まあ多分これから昨夜に引き続いて二夜目の徹夜をするんですけどもね。そう心の中で言って、ロータリーの外郭を通って駅から遠ざかった。

家に帰ると、着信が三件。そして通話がかかってきていた。
「青葉くんと話してるんだけどさ」
「論理武装は大事だよ」
「そうじゃなくて」
犬飼がツッコむ。
「あ、そうだった。私はいつ通話に入れば……」
「というか話ができるかも疑問」
「なんで」
「青葉くんと話してたら……まあスクショ送った方が早いか」

犬飼　拓海―割と強敵で草

このメッセージとともに、犬飼からスクショが送られてくる。
犬飼拓海―さゆさんより今回の通話の代理を任されましたので報告いたします。
あおば　―通話の代理ってどういうこと？
犬飼拓海―>>今も彼女と通話できないんですか？
―これに関しての
あおば　―さゆは通話しないってこと？
犬飼拓海―そうです
―彼女も相当堪えていたみたいで
あおば　―そっか
―それじゃあ、ここまでしてもらって申し訳ないけど、もう関わらない方が良さそうだからやめておくよ
―そんなにきついのに仲直りとか無理でしょ
―無理言ってごめんって伝えておいて
―巻き込んでここまでやり取りさせたのに迷惑かけて本当にごめんね

「このあとどう返したの？」
興味よりも申し出の成否が勝った。

「『とりあえず現状の説明と今後の動きの確認はしたいので、今回は申し訳ありませんが、私方とお話する機会を頂けないでしょうか』って」
犬飼、やるな。なかなか良いハンター、いやキラーじゃないか。そう思った私の口角が少し上がる。
「返事は」
「『わかった、何時くらいにする？』って」
よくやった、さすが生徒会だ。私はそんなことを考えながら犬飼を褒めたたえた。
「さすが」
「で、論理くんは何時ぐらいがいい？」
「二二時には確実にいける」
そう答えて部屋を見回すと、真っ暗である。私は電気をつけ忘れていたのだった。
「ちょっといったん切るわ」
そう言って私は通話を切った。親が戸を叩いていたからである。
犬飼拓海―今回は申し訳ありませんが、私方とお話する機会を頂けないでしょうか
私方(単数とは言っていない)
犬飼拓海―とりあえず通話は二二〇〇から
古井論理―結局通話はするのね？
―というかドクズで草
犬飼拓海―><（スクショ）
―これ草
―私方ってやつドクズすぎん？
古井論理―どゆこと
犬飼拓海―私方(単数とは言っていない)
古井論理―ま、いいのでは
犬飼拓海―とりあえず飯食ってくる
古井論理―いってら
犬飼拓海―飯食って君に余裕があれば少し後のことについて
―話そう
古井論理―おけ
犬飼との話が一旦終わり、八時になって夕食を摂りに階下へ降りた私は、コーヒーとエナジードリンクを忘れずに持って上がる準備をし、夕食のうどんをかき込んで風呂に一瞬で入る。八時四〇分、私は再びパソコンの前で通話をつないでいた。
犬飼は二、三分してから通話に応答した。
「飯食ってた」
「私もだ」

「で、通話の話なんだがねぇ」
「どうした」
「青葉くんをどうやって通話に入れようかって……」
「通話に招待って……ないのか？」
私はDM通話の画面を見る。「招待」の文字はなかった。
「DMグループ作るけど実験するからちょっと待って」
犬飼はそう言うと通話を切る。しばらくすると「塩の上に飛ぶ佐藤、犬飼拓海、古井論理」という名がついたDMグループからの着信があった。応答すると、通話はすぐに切れる。
「よし」
犬飼は通話に戻ってきた。
「で、さゆさんはどこにいたの」
「さっき言ったとおり公園」
「周囲の状況は？あと徒歩何分？」
予測が外れていたのだとすれば謝らなければいけない。私の口はこの日で二番目に速く言葉を吐き出した。犬飼は対照的にゆっくり答えた。
「徒歩……だいたい二分くらい。周辺にはフェンスがあるけど、公園を出てすぐの道のガードレールの向こうに高低差五メートルくらいの場所があって、下は墓地」
予想は意外と当たっていたようだ。安堵に似た感情が湧き上がってきたのを抑えて、青葉との話に向け方針を固める。戦いの準備をするような気分で内容をまとめていると、二一時三五分になっていた。
「そろそろか？」
「あと二五分」
犬飼は心なしか緊張が感じられる声で言うと、キーボードで何か打ち込み始めた。どうやら青葉と連絡を取っているらしい。
「一〇時は少し過ぎるらしい」
犬飼はそう言ってスクショを送った。
あおば　―一〇時は少し過ぎるかもしれないけど、大丈夫そうだよ
―出来るかな？
犬飼拓海―できますね
―少し待っていてください。
あおば　―出来る時にかけてね
犬飼拓海―わかりました。
あおば　―あ、いや、やっぱ声かけて
犬飼拓海―あ、了解しました
―あらかじめ『私方』と申し上げました通り、当方二人での対応とさせていただきます
―私の家庭の関係により、あまり声を張ることができませんのでそれの為の代替措置です
犬飼は少し黙って、今度は私とのDMに入力し始めた。

犬飼拓海—とりあえず国家らは文字で説明します
—ごじったぁぁぁぁあ
—わぁぁぁぁぁ
—とりあえず、状況説明のやつは声に出して読める内情じゃなかったので
—内情ってなんだよ()
—それに関して
—当方がLibreofficeで作成したものを元に説明していただければ幸い
なかなか文書が送られてこないので、私は自己紹介と説明の練習を始めた。
「お初にお目にかかります、今回さゆさんから調停を承った古井論理です。今回の調停についていくつかお話をさせていただきます。まず、我々はさゆさんの委任を受けた代理人として来ております。我々との通話を放棄したり聞かれなかったり切られたりするのはご自由ですが仮にそうされた場合その行動はさゆさんとの交渉の放棄、ひいてはさゆさんとの関係一切の放棄を意味します。予めご了承ください」
しばらくすると、犬飼は文書を送ってよこした。今日聞いた通りの内容が書かれている。
「これを読めばいいのね？」
「そうだよ」
「でもこれは見た人の口から説明するべきものじゃないかな」
「……」
「犬飼くんが小声で説明したほうがいい。聞こえなかったら私が読むことにすればいいから」
「まあ……そうか」
私は犬飼との打ち合わせを再開した。
「あ、法律系の話を出すならきっちり調べてからにしろよって佐藤が」
「一応ポケット六法をうちの妹から借りて調べるという手はある」
犬飼は驚きを隠せないといった声で聞く。
「まじか」
「ああ。うちの妹は裁判官になって、退職後は弁護士になることを目指してるんだ。私より優秀な“自慢の妹”ってやつだな」
私は最後の一文を吐き捨てるように言った。妹が生まれて以来ずっと彼女と比較され卑下されてきたのだから、私より彼女の方が優秀なのは自明の理だろう。そう言いたかったがかろうじてこらえる。
「……なるほど」
犬飼は少し引いていた。私は言葉を続ける。
「まあそこまで優秀な妹が即座に答えられないし辞書みたいにページを引けないんだから素人の私には無理だ。というわけで

法律系はなしで行こう」
「せやな」
「あとは……何を打ち合わせしようか」
そのとき私は、エナジードリンクが手元にないことに気づいた。どうやら私は持って上がる準備をしておきながら階段の横に置いてきたらしい。
「ごめん、ちょっとエナドリ取ってくるわ」
私はそう言ってマイクをミュートにした。そして階段を駆け下り、エナジードリンクとコーヒーを小脇に抱える。私はそうして、また階段を駆け上がった。マイクミュートを解除すると、犬飼は緊張した声で言った。
「さて、そろそろ五五分か……青葉くんに正義の鉄槌を下さないとね」
私は慌てて言った。
「ちょっと待て、私たちは正義の味方なんかじゃない。紛争調停の使者だぞ。正義のために何かをしてはならん、反論が下手くそになる」
「わかった」
「青葉くんからの連絡は？」
「ない」
私は少し待って、犬飼にDMを送るよう指示した。
犬飼拓海―当方準備完了いたしましたので通話の方始めさせていただきます。
一〇時を三分過ぎたときだった。犬飼の音声に着信音が入った。
「どうだ」
犬飼は無言でスクショを送った。
あおば―おっけーだよ、はじめるね
犬飼と青葉、そして私が入ったグループが画面に現れ、通話のボイスチャットが開く。私は少し緊張に震える手でエナジードリンクの栓を開け、プシューという炭酸の音とともに通話のボイスチャットに入った。
「こんばんはー」
青葉の緊張感皆無な声が、私の緊張をより強くした。中学生時代に吹奏楽部の曲紹介や道案内で培った図太い神経も悲鳴を上げている。
「……こんばんは」
私は声が震えるのを抑えるため、深呼吸をして頭の中を空にする。何も恐れることはない、相手はただの調停交渉相手だ。私がヘマをしようが完璧にやり遂げようが、何も変わることはな

い。決裂しても交渉が成立しても調停は成功する。ならばとことんやってやろうじゃないか。
「お初にお耳にかかります、さゆさんより調停依頼を受け交渉に参加させていただきます、古井論理です」
「あ、よろしくね」
青葉は相変わらず緊張感皆無だ。これは余裕なのか虚勢なのか、それとも平常運転なのか。私にはわからなかった。
「まず現在のさゆさんの状況を説明させていただきます」
犬飼が話を切り出す。青葉は飄々とした態度で聞いていたが、犬飼が
「一歩間違えれば取り返しのつかないことになるところでした」
と言ったところで「そうですか」と明らかに反省の色が見える声で言った。
「それで、青葉さん。これからどうするかお聞きします」
「僕のせいでそうなったのなら離れ……たほうがいい、というより離れる以外ないですよね」
青葉は即答した。あまりのことに私は危うく「本当ですか」と聞き返すところだった。犬飼も耳を疑っただろう。
犬飼拓海―古井君や
―声を出さずに反応求
―仲直りしたいけどしたくない、というかむしろしたくない。
―→彼女の考え
「それはどういう意味ですか？」
私は少し追求することにした。そして追求しながら犬飼にメッセージを打つ。
古井論理―それって言った方がいい？
犬飼拓海―一応
「僕と関わったからそうなったのなら僕が悪いですよね。繋がっているといってもこのチャットアプリだけですし、フレンドから削除すればすぐに関係は断てます。ですから、関係を切ります」
青葉の言葉が終わると、私はさゆさんの考えを伝えることにした。
「さゆさんは仲直りしたいけどしたくない……というかむしろしたくないとのことです」
「そうならなおさら関係を切ったほうがいいですよね」
「そうですね。そういえばさゆさんは青葉さんと付き合ってるハルさんから青葉さんのことを聞いたり、一緒にいるときに青葉さんからの電話がかかってきて楽しそうに喋るのが辛いと言

ってたんですが……」
この犬飼の言葉は、青葉を驚かせたようだった。
「え？そんなことハルからは何も聞いてないんだけど……」
この青葉の言葉に、私と犬飼は同時に驚愕の声を上げた。
「それは……本当ですか！？」
「うん。何も聞いてない」
青葉の言葉に、私は頭が混乱するのを感じた。
「まさかのハルさん黒幕説……？」
「……あるなぁ」
私と犬飼は新たな事実に驚きしか感じなかった。
「で、そういえば君たちはどういう関係なの」
青葉の質問に、私が答える。
「小説を書いている仲間ですね。小説の共同執筆もしています」
すると青葉は驚いた口調で言った。
「へぇ〜、実は僕も書いてるんだよね」
これは意外な事実だった。とっさに私と犬飼は同じようなことを言った。
「どんな感じですか？」
「見せていただけますか？」
青葉は尻込みしたが、私たちが押し切るとテキストファイルを送ってみせた。その文章は、美麗であった。そして同時に筆者のイマジネーションの豊かさを示すものでもあった。
「これは……すごい」
読み終えた私は言った。圧倒的な文才を感じる。この文章は、私には書けない。そう確信した。
「すごいじゃないですか……圧倒されました」
犬飼が感服したといった口調で褒め称える。私たちは自分の小説を送り、青葉に見せた。ここから雑多な談議が始まった。
「古井さんの小説も面白いねぇ……というか僕の文なんてそんな、まだ公開すらしてないのに」
「してください」
犬飼と私は同時に口に出していた。今日は不思議にも犬飼と発想が合う。話が一段落したところで通話を切り、私たちは再び二人で通話を始めた。
「よかった、一件落着が見えてきたぞ」
「それよりハルさん黒幕説浮上の方が衝撃だったけどね」
「それはそう。驚愕の事実だなぁ」
私は驚愕の事実を文書ファイルにまとめながら、犬飼に私の立ち回りの上手さを自慢した。
「そういやあれ上手くなかった？あの声を出さずに反応……ってやつ」
「それな」
「反応どころか平然と質問を続けるという……」
「あれは強いわ」

「さて、もう二三時かぁ」
「まあオールするんだけどね、意味もなく」
こうして徹夜しても、明日は日曜日。まったくもって奇跡的だ。
「それでなんだけど、僕は親が寝たから普通にそういう話できるよ」
「深夜テンションでの軽率な猥談やめーや」
「えー」
「それに私の親はまだガッツリ起きてるんよ」
私の親は遅寝だ。ときには三時頃まで起きていることすらある。
「ええ……」
「まあ、四時ぐらいには寝る……と思う」
「そうだ、今日面白いツイート見つけたんだよね」
「何やってんの」
「いや、午前中に」
「あー、そういうことね」
と、ここで犬飼がチャットに入力を始めた。
犬飼拓海―でもあんなに取り乱したさゆさん初めて見た
―ちなみに
―お母さんは場所聞くの失敗したんだけど
―「どこにいるの？(優しい口調)」だったんよ
―僕は
―「さゆ、今、どこにいるか教えてくれない？」って聞きました
―「何か周りに場所がわかるものとかさ、ない？」
―「よかった。そこにいたんだ」
―(ちなみにここで背中摩ってる)
―「そこで蹲ってるのしんどいでしょ？あっちのベンチでお話しよ？」
「イケメンか貴様」
私はそう吐きすてた。犬飼ならやりそうなことだとも思ったが、まさか本当にやっていようとは思わなかった。
犬飼拓海―立ち上がってくれたから
―「途中で転んだりとか何もしてない？大丈夫？」
―あ、ちな歩道を全力疾走してるとき、周りの人から割とやばい目で見られてた
―(全力で走りながら器用にスマホ操作してるからね)
「まあそりゃあそうだろうな。そんなやつ見たら私なら三度見ぐらいするわ」

—さゆさんベンチに座らせて落ち着かせてるとき
—「大丈夫？」(複数回)
—途中で何度か「ごめん」って言われたけど
—「いいや、君が謝る必要なんてないよ。ただ僕が行くって決めたから来たの」
—「なんで来たのかって聞かれたも答えないよ。まぁそれは後でわかると思うから」
—ちな帰り際
—母「ありがとうね」
—僕「いえいえどうも」
—僕「さゆ、あおばくんはもうブロックしといていいからね。後はこっちで全部何とかするから。じゃ(颯爽と去る)」
「お、えらい。イケメンだな」
私はそう言ってから、前に犬飼が車道側を歩きたくないと言っていたことを思い出していた。
犬飼拓海—ちなみに、公園から家に戻るときはちゃんと車通る側に立ってた()
—(歩道っていう概念がない道ね)

すぐに解消された疑問に、私は改めて犬飼の愛の強さを感じた。気づけばすでに三時。親はまだ寝ていなかったが、やっと寝室に入ったようだった。
「さて、あと三時間で日の出だな」
「まだまだじゃね……？」
「三時間も待つのは暇だからなあ……そうだ、エナジードリンクまだ残ってたわ」
「草」
私はエナジードリンクを一気に飲み干して、頭上の天井を眺めた。窓の外で光る路地の街灯が、カーテンを透かして花柄を天井に映していた。
犬飼の大まかな家の位置や見つけた状況についての話をして犬飼が如何に凄かったかを知り、そして犬飼の家の特定可能性を検証した……といえば聞こえは良いが、単にGoogleのマップを見て遊んでいた朝五時、犬飼がチャットに何かを送ってきた。気づけば犬飼はミュートになっている。
犬飼拓海—ワイ母
—起きた
古井論理—majika
犬飼拓海—まじだ

古井論理—hayaokiyana

私は敢えてローマ字で返信を送った。そしてマイクをミュートにする。犬飼のマイクがミュートになったからである。

犬飼拓海—君は喋っても構わんよ

私はそっと音を抑えてチャットに打ち込む。親がトイレに起きたことを察知したからだ。

古井論理—おけ

親がトイレから寝室に戻り、一つだったいびきが再び二つになった。私はそっとマイクミュートを外し、犬飼に呼びかける。

「犬飼、応答できるか？」

「……」

犬飼は再びチャットに打ち込み始めた。

犬飼拓海—わいの母起きたー

—ワ~

—😄

古井論理—ワ~

—🥳

犬飼拓海—😄

古井論理—ＡＬ

犬飼拓海—:D

古井論理—＊—＊

私たちはもはや深夜テンションに冒されている。そして深夜テンションで書くことは、大体の場合において面白いのである。

「いやあ……深夜テンションですなあ」

「そうだねえ」

「半角カタカナ……」

私たちは意味もなく爆笑した。

犬飼拓海—まじで今日のやつは武勇伝としてかたり継げる

「昨日じゃね？」

犬飼拓海—昨日だけど

古井論理—かに

—　Ｙ　Ｙ

—／（＋……＝）／
—／／／　／／／

「蟹……」
「うん、蟹」
「しかし犬飼君の武勇伝は愛の力だね」
「アドレナリンだから」
「愛の力もあるだろ」
犬飼は

犬飼拓海—アドレナリン＋愛の力
—つっよ
古井論理—つええ

「理性と愛と本能の力だな」
私が言うと、犬飼は
「今から比率送るわ」
と言ってチャットに入力を始めた。

犬飼拓海—本能と理性の比率
—LINE来た時　六:四
—家出るって言った時　八:二
—彼女宅に着いた時　〇:一〇
—一気に逆転してて草

私が笑い始めると、犬飼が慌ただしくキーを打ち始めた。

犬飼拓海—おやふら
—しずかにぷりーず

私が静かに笑いを押し殺す。犬飼のマイクミュートが外れたのは一〇分後のことだった。
「そうだ、朝ごはんにマック買うわ」
犬飼はそう言って、通話に舞い戻った。
「マック？」
「そう、朝マックする」
私は「いいなぁ、金があって」と言おうとしたが、ふと数日前犬飼か貯金していると聞いたのを思い出してその言葉を引っ込めた。
「自分へのご褒美かな」
「そうだよ」
「まあまだ完全に解決したわけじゃないが……一番きつい峠はとうの昔に過ぎ去っただろうな」
「小説のネタに良いかもしれない」

「そうだなぁ……まあ読まれるかもしれんがな」
「あー、全然眠くないわ」
「そりゃそうだ、アドレナリンと愛の力は尾を引くだろうからね。そうだな、一一時頃には疲れて寝ることになるんじゃないかな。私もそんな気はしてる」
　犬飼がゆっくりうなずいたのが、一二八キロビット毎秒の音越しに聞こえた気がした。
「エナドリも買うかぁ……いつもの魔剤はやめて、ゾーンでも買おうかな」
「そこはお金があるムーブだな」
「まあね」
　犬飼と私は、大きく息を吸い込んで未だ明けやらぬ波乱の夜の名残、朝焼け直前の夜の最後の一部分を雑談に費やした。
　午前六時四二分、犬飼は空の写真を送ってよこした。

犬飼拓海―月綺麗じゃね?
古井論理―それな
犬飼拓海―めっちゃ綺麗で草
古井論理―たしかに
　―きれいすぎるほどきれいだ
　―人一人救った気になっているからだろうか、きれいと言うよりもとても美しい

　私は気づけば朝の空気が漂う庭に出ていた。空を眺めれば、見事なまでの曇り空である。

犬飼拓海―わかる
　―あと外の空気が気持ちいい
古井論理―わかる
　―清々しい
犬飼拓海―(写真撮る時に窓開けた)
古井論理―私は外に出た
犬飼拓海―ちょっと冷たいのがちょうどいい
古井論理―すごくわかる
犬飼拓海―ちょっと顔とか洗ってくるから待ってて

　犬飼が戻ってくるまでの間、私は曇り空にカメラのレンズを向けた。数回シャッターをタップし、よく撮れた一枚を犬飼に送る。

犬飼拓海―曇り空で草
古井論理―この空さえ美しく見えるのである
　―詩がかける
犬飼拓海―もう少ししたら晴れると思うよ

古井論理—その頃には夜は明け、陽がしっかりと差しているだろうね
犬飼拓海—いまおーえうみゅーとにしてるけど
—おーるみゅーと
古井論理—うん
犬飼拓海—寝てないからね！(謎の意地っ張り)
古井論理—草
犬飼拓海—朝マックしようかな……
—気分いいし、昨日頑張った僕への勲章と兼ねて

やはりあの朝マックの話は冗談ではなかったんだな、そう思った私は迷わずあのとき送りたかった文章を送る。

古井論理—いいなぁ
—朝マックしたいなぁ(
—謎の詩ができた

そうして、私は詩の原型を送ったのである。

夜明けの曇は美しい
友に言われて夜明けに気づき
醒めやらぬ空を眺めれば
見事なまでの曇り空
人一人救った気になって
勝手に報われているから
曇り空すら美しいのだ
犬飼拓海—私情ゴリゴリ文章から唐突な美しい詩はやめてくれwww
古井論理—草
—再送

夜明けの曇は美しい
友に言われて夜明けに気づき
醒めやらぬ空を眺めれば
見事なまでの曇り空
人一人救った気になって
勝手に報われているから
曇り空すら美しいのだ

私はそっと息を吸う
救いの助けとなったという
その喜びは空気も変える

ああ　あの日々でこぼれ落ちた
救えたはずの盟友(とも)のため
私は二人を救えただろうか

許せと泣いた燃殻(わたし)の目
あのような目はもういらぬ
さあ見せてくれ　輝ける灯を

十六夜の月の名残に私は願う
どうか二人に平穏を
友よ　友の愛する人よ
どうか健やかな毎日を

救えず終わったかつての友人(とも)も
今は感謝に埋もれる

失礼なまでの押しつけが
功を奏した朝曇り

犬飼拓海―かっけぇ
古井論理―あと
　―やっぱ何もない
犬飼拓海―草

私はとある決断をした。財布の中のお金を確認し、マックのメニューを検索する。

古井論理―飯食ってくる
　―朝マックである
犬飼拓海―おっ
　―わいも今から行くで
古井論理―ただ私は最寄りのマックが三〇分圏なのである

犬飼はマイクを再びオンにし、「草」とだけ言って再びマイクをミュートにする。明けた十六夜が、私たちの前には曇り空と晴れ空として別個に広がっていた。

直後、私は家を飛び出して伊勢中川(いせなかがわ)行きの近鉄電車に飛び乗

った。朝の駅は空気も澄み、ただ北風とまばらな人影だけが支配する場所だった。

「今からマックに行くんね」

犬飼に通話で言うと、犬飼は昨日さゆさんを見つけたという公園の写真を送った。私は電車を降りてからマイクをオンにし、感想を言った。

「これはドラマチックすぎる」

伊勢中川の改札を出て、踏切を渡る。私の前には変電所がそびえていた。

「変電所の写真送る」

そう言ってカメラを構え、変電所を見上げるように数枚の写真を撮った。変電所は一昨日の月食も、昨日の十六夜も全て間接的に照らしていた太陽を上に見てディストピアの崩壊のような景観をただ朝の風景に加えていた。

私が高茶屋に差し掛かった頃、犬飼は仮眠を取るといって通話を切った。私は万歩計を確認したが、一万四千歩の歩行距離を計算するのが面倒になって一四五九〇が一四五九一になったときに万歩計のディスプレイを切った。そして私は、非日常の締めくくりの散歩を昼下がりに終えてマックのハンバーガーを食べ、再び勉強とその他色々に追われる高校生活へと戻ったのであった。

―完―

作者コメント

これは紛れもない「実話」です。これは実際に去年の一一月に私が経験した話で、私が経験した中で一〇番目くらいには緊迫した状況でした。カクヨムでも公開中です。

リンク〈リンク（カクヨムへ飛びます）〉

皐月の病と宇宙人

古井論理

五月になって初めて訪れた平日、朝の空は陰鬱なほどに晴れ渡っている。天気予報によれば降水確率は〇パーセント、快晴になるらしい。

「……体育もあるんだよな」

家の玄関を出て道を学校に向けて歩き、電車に乗っても僕の心には空とは対照的にグレーどころか真っ黒なモヤモヤが広がっていた。自分の手に目をやる。いつものように途切れ途切れの運命線、ぶつ切れた頭脳線、そしてくっきりと太く刻まれた生命線。

「……占いは科学的根拠が乏しいが、全くないわけではない。それどころか手相は……」

そんなことを思ってしまった。占い好きだというのに、悪い占いを信じるという愚行をしてしまった自分を責めつつ、血液型占いの非科学性を論じる。

「おい」

つり革を持って立ったままの僕の肩を何者かがつかみ、乱暴な声をかける。

「……すみません、どうされましたか」

僕はいつもにも増して無駄に敬体になった声を上げた。

「お前、どうして座らないんだ？顔の青さが限界超えてるぞ」

乱暴な声に反比例するような発言。僕は顔を上げ、声の主を見た。

「どうした」

声の主は僕と同学年ぐらいの男子高校生らしい。彼は声の三乗に比例する勢いで柄の悪そうな顔を僕に向け、心配げに僕を見た。

「すみません、……」

ここから僕の記憶は曖昧である。なんとなく思い出す限りでは、倒れ込んだ僕を相手が心配そうにのぞき込んでいたのが最後のはっきりした記憶だ。

「……おい、もう大丈夫か？」

僕の視界がはっきりしてくる。そこには先ほど声をかけてきた柄の悪そうな男子高校生の顔。

「大丈夫……だと思います」

僕はなんとかそう言って周りを見回した。保健室らしいが、見覚えのない場所だ。

「……ここは」

「小宮高校の保健室」

柄の悪そうな男子高校生はそう言って僕の目の前で手を振った。

「これ何本に見える？」
「三本です」
「じゃあ大丈夫だ。昼休みだぞ、飯は持ってるよな？」
「……えっと」
「鞄は教室に運んでおいたからな。パンはさっき売り切れたぞ、弁当はあるよな？」
「あ、はい」
僕はそう言ってベッドから起き上がった。そこで僕は、先ほどまで男子高校生だと思っていた彼が女子であったことに初めて気づいた。よく見れば胸が大きい。それに、セミロングの髪を電車の中とは違って三つ編みにして可愛らしいゴムで留めている。
「……そうだ、名前は」
「僕の、ですか？」
「そうだ。お前以外に誰もいないだろうが」
「山北（やまきた） 弘毅（こうき）です」
「そうか。私は小町田（こまちだ） 佐恵（さえ）だ。よろしくな」
小町田さんはそう言って、保健室のドアを開けた。
「山北くん、行こう」
「は、はい」
僕は小町田さんについて保健室を出る。途中、外にいた一般陽キャたちが小町田さんを見たが、小町田さんが無視していると陽キャたちはさっさとパンを持って歩き去った。
「同じ組なのになんで私を知らなかったんだ？こんなに目立つのに知らないとなると、かなり周りが見えてないような感じだな」
小町田さんはそう言って僕を小突く。僕がなんと返そうかと困っていると、小町田さんが「着いたぞ」と言って1年5組教室のドアを開けた。
「弁当箱……」
小町田さんを待たせてはいけないだろう。なのに、弁当箱は見つからない。
「おい、見つからないのか？」
「……はい」
「そうか……」
小町田さんは十数秒考え込んだあと、「そうだ」と言って鞄から菓子パンを取り出した。
「これ、食べるか？」
クリームパンの袋を僕に見せ、小町田さんは首をかしげる。
「食べないのか？」

僕は小町田さんからクリームパンの袋を受け取った。
「ありがとうございます。ところで小町田さんは大丈夫なんですか？」
「ああ、弁当があるから大丈夫。遠慮せずに食べてくれよ」
「ありがとうございます」
僕はそう言って、クリームパンの袋を開けた。ふんわりとした甘い香りが僕の鼻をくすぐる。クリームパンは甘く口の中に広がり、少し舌を乾かしながら僕の喉咽（のど）を通り過ぎていった。
「そうだ、山北くん。何か部活には入ってたりするの？」
小町田さんに聞かれた僕は、「入ってません」と答えてクリームパンの袋を丸めて結び、それをゴミ箱に放り込もうとした。
「ちょっと待って、『春のパン大祭』のシールを剥がさせてくれない？」
僕は小町田さんの口調が少し柔らかくなったのをはっきりと確かめた。
「さて、山北くん。部活に入ってないなら、放課後は暇でしょ？」
「あ、はい」
「なら、ちょっと私について来てくれない？ちょっと話したいことがあってさ」
僕は何か話されるようなことがあるかと思案し、そんなことは思いつく限りではあるはずもないと結論づけた。
「大丈夫、割と大したことだから」
「大丈夫じゃないのでは……」
「まあいいよ。午後の授業が終わったら、正門に来て」
小町田さんはそう言うと、シールを剥がしたクリームパンの袋を僕に渡してから弁当をかき込み始めた。

放課後になって、僕は正門に向かった。昼休みの直後頃からクラスの陽キャたちが僕を何か好奇の目で見ている気がするが、理由は恐らく小町田さんと「つるんでいる」と思われているからだろう。それはともかく、小町田さんはすでに正門で待っていた。
「じゃあ、行くよ」
「行くってどこへ……」
「そこのスーパーマーケット。フードコートに行けば、多少話しやすくなる」

「なるほど……？」
「じゃあ出発！」
小町田さんはそう言って、僕の目の前で歩き始める。僕が慌ててついて行くと、小町田さんはふふっと笑って歩みを速めた。

フードコートはガラガラに空いていた。そのフードコートの端の方の椅子に座った小町田さんは、僕に座るよう促す。僕が座ると、彼女は小さな声で話しはじめた。
「君は宇宙人だね？」
「え？」
僕の脳の処理容量を超えた発言に、僕の思考はストップする。
「少なくとも地球の人類じゃない。倒れたあとに正体を見せちゃ駄目だよ」
「……？」
「大丈夫、周りには記憶処理をしている。証拠写真はおそらく全て消えているはずだ。君には見せてあげようか」
彼女はそう言って、スマホの画面を見せた。そこには、ピンク色のタコのような三十センチぐらいの丸い生き物がいる。
「これは……」
「だから君の正体だよ。君が寝ていた医務室のベッドだろ？それで、詳しくは教えられないが私は一応とある組織の協力者だ。組織は君のような宇宙人を匿う場所。ところで君の記憶はどれだけ完全なの？」
「……？」
「君、記憶喪失になったりしてない？」
僕は少し自分の過去に思いを馳せた。
「そうですね、八歳以前の記憶はありません」
「そうか。じゃあその時点でうちの組織が関わってるだろうな……」
「どうしたら良いんですか？」
「とりあえず、君がここまでやってきた宇宙船を探したい。その宇宙船を借りたいんだよ」
「……どうしてですか？」
「その宇宙船はおそらくタイムマシンの機能を持っている。それを使って、とある星を助けたい」
「なるほど。では探しに行きましょうか」
「おい、お前……」
「何か思い出せないと思ったんですが、隠し場所はわかりました。タコの姿だと不自然なので、人の姿に戻り

ましょうか？」
「そうして。全く、君は何度もこうして私たちを手間取らせるんだね」
「すみません、その都度記憶処理されてるんで」
「じゃあ、世界を救いに行こうか」
「はい」
僕たちはとある山に向かう予定だ。宇宙船を掘り出し、地球を救うために。

「津高生は止まらない」について（二〇二二年三月三〇日追記）

古井論理

この脚本は一一人の戦争体験者に私が直接取材して得た資料やインタビューの記録を使って、その人たちの反戦の思いも込めて書いたものです。私のため、そして私達の過ごす未来のために色々話してくれた人たちの言葉を引用してもいますので、ここに掲載したことで戦争のない未来のためにこれが活用されれば幸いです。

私はコロナ禍が戦争に似ていると思います。このように自由が制限され、楽しいことが制限され、生活にも困る状態に簡単になりうる状態が戦時状態以外にあったでしょうか。

戦争は国と国とがそれぞれの生き残りを賭けて戦う、人類が繰り返してきた悲惨な「禍」です。コロナ禍は病原ウイルスと人類がそれぞれの生き残りを賭けて戦うことになってしまった、悲劇的な「禍」です。戦争の中で国が未来を守るためには、攻め込まれたときには最善の行動をしなければなりません。その最善の行動は、コロナ禍の中で行われる「最善の行動」と本質的には何ら変わらないと思います。コロナ禍の中で自らがコロナウイルス感染症に罹ってしまわないように、そして大切な人や自分自身が死なないようにすれば良いとされているのと同じように、戦争の中で自らの国が対立する国によって滅ぼされないように、そして大切な人や自分自身が殺されないようにしなければならないと私は思います。それは私に自由の尊さ、知識の大切さ、戦争の悲惨さや愚かさ、未来を守ることの大切さや生命の尊さ、戦争は起きてはならないということ、そして正義の対義語が悪でなく別の正義であるということを教えてくれた人たちの言葉からも感じられるものでした。ですから、戦争について皆さんが学んでくれることを心から願っています。

戦争を起こすのは兵器や戦争に対して誤解を抱いている人なのです。それは歴史が証明しています。兵器の威力をどんどん上げていけば一回の攻撃でより多くの人が死ぬ、それは当然のことです。その兵器の威力がわかっていないから、そして戦争のことをわかっていないからその兵器を人に対して使ってしまうし、戦争を起こしてしまうのです。本来、戦争は話し合いがどうにもならず、それ以外のどんな手を使っても事態を打開できないときに起きてしまうものです。そうして起きてしまったときには対応できるようにそれなりの力を持っておく。これは歴史上成功した国家ならどこでもやっていることです。そして、何でもかんでも話し合いで解決するわけではありません。話し合いで解決するなら、多数決などといった手段は存在しないはずです。やむにやまれぬ事情がある人の一票と、どうでも良いけどとりあえず多い方に入れておこうという人の一票が「全く同じ」である多数決は、極論してしまえばほとんど戦争と同じなのです。力が強い、あるいは数を揃えた側が勝つのが多数決

で、これは戦争も同じです。どちらがより良いかなどといったことは無視され、ただ多い方が勝つのですから、結果は戦争と同じようになります。多数決は人が直接死なない戦争とも言えるでしょう。その意見を通さないと生活が危ない人の一票とその意見ではない意見が通っても何も変わらない人の一票が同じ価値を持つのですから。戦場では命一つの価値はどんな人でも「兵士一人」であり同じなのと一緒です。

私は捉え方によっては矛盾した発言をしていると言えるでしょう。ですが、どちらも事実です。戦争がない世界のためにどうすれば良いか、それは皆さんが考えてください。資料と先人の言葉がその一助となれば幸いです。